

---

# あまいろ。

Natsuki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あまいろ。

### 【Nコード】

N8326X

### 【作者名】

Natsuki

### 【あらすじ】

部員不足で活動休止状態の演劇部に所属する、高校二年生の遠野あきは、三年生でお嬢様の永野友子、友子の秘書で二年生の緒方怜美と日常を過ごしていた。始業式の日、一年生の二宮砂恵が、演劇に興味はないが入部したいと申し出る。友子は砂恵を入部させることに抵抗を覚えるが、今の演劇部の意味を再確認し、砂恵を演劇部員として受け入れる。天真爛漫な砂恵であったが、その手首には過去の傷痕が残っており、あきたちには見せない陰の部分を持っていた。

## 第一章 演劇部（前書き）

初投稿です。ルールなど守れていない部分があったらすみません。

三年くらい前に書いたものです。全六章。

キャラクターの設定はラノベ的です。内容はあんまりラノベじゃないかも知れません。

一章はそうでもありませんが、軽い百合要素がございます。

## 第一章 演劇部

### 第一章 演劇部

青い空は、どこまでも続いていて。

冬から身を潜めていた植物の芽。

その一つ一つが、葉を広げ花開いていた。

まるで春の訪れを祝福するように。

空では、大きな雲を、風が動かしていた。

それは圧倒的な開放感をもたらしていた。

世界はただ、単純に美しい。

でも。

この世界は。

本当に、あるがままの世界なのだろうか。

この空は、遠き日に汚されてしまったのではないだろうか。

人の心に、触れたから。

だから。

空の下で生きる、人の心もまた、汚されてしまった。

どちらが先かなんて関係ない。

空の下に人があり、人の上に空がある限り、続いていく。

終わらない、悲しみの連鎖。

人は、生きる。

心に汚れた空を持ちながら。

浄化されるその時を、ただひたすらに待ち続け。

悲哀に満ちた、この世界で。

私たちは、夢を見る。

すっかり桜並木となった渡り廊下を歩き、心地良い春の匂いを吸い込みながら私は旧校舎へと向かって歩いていった。今日から上級生の色となった赤色の校章が、少しこそばゆく感じられる。何となくネクタイが曲がっていないかを手で確かめる。

外では新入生の男子だろうか、大きな声でお喋りをしながら下校していた。彼らは何を思い、何を夢見てここまで来たのだろうか。

多くの新入生は何の目的も持たないままに入学してきたのだろう。そして彼らは与えられた世界を漫然と過ごすだけで限られた時間を浪費し、無為に失っていくことを、無意識の内に選んでいる。

そう思うことは、偏見だろうか。もつとも、今の私も似たようなものかも知れないけれど。

「あきー」

私を呼ぶ声が聞こえて振り返ると、渡り廊下の入り口に、演劇部の先輩である、ともたんがいた。その後ろには、演劇部員ではないが彼女といつも行動を共にしている、れみいの姿があった。二人は私に追いつこうと早足で歩いていた。

春の光にも負けない柔らかさを持ったともたんのロングヘアが、豊潤な陽射しをたっぷりと含んだ温かな風になびいている。

「あ、ともたん、れみい、こんにちはー」

私は立ち止まり二人に手を振った。

「お久しぶりです、遠野さん。今日も一日ご苦労様でした」

私と同じく二年生になった黒ぶち眼鏡のれみいは、私と目が合うと、ぺこりと頭を下げて丁寧に挨拶してくれた。

「しっかし二年生になっても、あきは相変わらずねえ」

ともたんが私の頭に手を置いて言った。

「相変わらず背が低いってことですね、しくしく」

私は高校二年生、というか、高校生にしては身長が低すぎるという悩みがある。

「まあまあ、いいじゃない。そこがあきらしいんだから」

ともたんはそう言っただけで笑った。

「ところで、ともたんもれみも、新しいクラスはどうでした？」

「んー、あたしは五組になったわ。二年からの友達もまあまあいた感じね」

「私は四組でした。遠野さんと同じクラスでなくて残念です」

れみはそう言って、少しだけ肩を落とす素振りを見せた。

「そうだね。私は一年の時と同じで一組だったよ。来年こそは同じクラスだと良いね」

「はい、そうですね」

れみは再び笑顔に戻る。

「うん。それでともたん、今年は部員、どれぐらい集まると思います？」

私は今日一日、学校に着いてからずっと気になっていたことを質問する。

「うーん、どうかしらね。まあ今の状態じゃ来ないだろうなあ」

ともたんはあっさりと言った。

「えー、そんなあ」

予想通りとはいえ、やはり現実に言われると悲しいものがある。

現在の演劇部は、部員不足に悩まされていた。去年の十月に十名いた三年生が引退してしまい、半数以上の部員が一気にいなくなってしまった。元リーダーシップに優れていた三年生がいなくなり、大半が上級生に頼りきりであった下級生が残ったのだが、上級生の引退に伴い部員達の熱も冷め、一人また一人と、辞めていくか幽霊部員となっていた。そして二期が終わるころには、部員は私ともたんだけしか残っておらず、演劇部とは名ばかりの溜まり場となってしまう。

ただ、私はそれでも良かった。確かに演劇は楽しい。けれども、

仲間さえいれば楽しいことなんて他にもいっぱいあると知っているから、演劇にこだわる必要なんてどこにもなかった。

だから私は部活動という枠には捕らわれずに、演劇部室という名の溜まり場へと足を運び続けていた。それから、もう半年になる。

「でも、ハクラス分も新入生が入ってきたし、中にはほら、間違えて入る人もいるかも知れませんかよ」

私はともたんを見上げる。ともたんは変わらず暢気に見えるが、その胸中ではどのように思っているのかは分からない。何故なら彼女は、誰よりも演劇を好きでいたから。

「間違えて入られても困るけどねえ」

ともたんが私の視線に気付いてか、こちらへと振り向きかけたところで、私は反射的に廊下へと視線を戻してしまった。知り合って一年が経った今でも、私はともたんと目が合うたびに、ひどく緊張してしまう。

ともたんを一言で表すとすれば、あまりにも美しい人、だ。

私はともたんを初めて見た時、彼女の纏う、上品かつ高潔な雰囲気、上品かつ高潔な雰囲気に圧倒されてしまった。けれども実際話をしてみると、言動は意外なほど垢抜けており、すぐに仲良くなる事が出来た。

私は演劇部に入部して以来、ほとんどの演劇技術をともたんに教えてきた。そして演劇部に人の出入りがなくなっただけでなく、溜め息をつきながら私と一緒に演劇部室へ通い続けてくれた人。演劇部の中で誰よりも演劇に情熱を注いでいた。だから、こんな演劇部になっってしまったって一番やるせない気持ちになっただけ、ともたんだっただろう。

「今年もあきみたいな演劇大好き子が入ってくればいいんだけどねえ」

「私は別に演劇大好き子ではないですけどね」

「あれ、そうだったの？」

「え、今までずっとそう思われてたんですか？」

「あれだけ真面目に通ってたら誰だってそう思うわよ。ねえ怜美」

そしていつも、ともたんの後ろに付いて回るれみい。彼女は自分から何かを言うことはないが、相槌の天才で誰よりも礼儀正しい。それに何より、全ての動作が機械のように完璧だ。

「はい、私も遠野さんは演劇を心から愛していると思っていました」「心から愛するって、軽く人生賭けてますね」

れみいは演劇部員ではないが、ともたんに付いて演劇部室に通っている。それはただ単に、れみいがともたんの友達だからというわけではない。

「人生を賭けられるものがあるということは、素晴らしいことです」「それはまあ、否定しないけどね」

「怜美はあたしのために人生賭けてるわけだから、素晴らしいってことね」

「い、いえ、そういう意味で言っただけでは……。もちろん、秘書としてお仕えることは身にあまり光栄ですが……」

「それは羨ましいですね。私にもれみいみたいな秘書が欲しいなあ」「そんな、私などにはもつたない言葉です」

ともたんの親は大臣を務める高名な政治家で、れみいの親はその第一秘書をしている。そんな関係から、親と同じくれみいもともたんの秘書を務めている。初めて聞いた時は突拍子もない話で意味が分からなかったが、この二人の家系は先祖代々主従関係を結んでいるという、現代では中々考えられない希少な組み合わせらしかった。

ともたんとれみいは、物心が付くずっと前から一緒に育てられてきた。もちろん、それぞれが特別の教育を受けて。だからこそともたんのまとう瀟洒な雰囲気も領けるし、れみいはいつだってともたんの後ろに付いて回り、スケジュールを管理し、雑用もこなし、お手本のように礼儀正しい。まったくもって秘書として申し分のない働きをしている。

そして一見どこにでもいる一般人の私を含めた三人は、いつも演劇部室に集まって他愛のない話ばかりをしていた。

お嬢様、その秘書、一般人。中々不思議な組み合わせだった。



私たちはお喋りをしながら、旧校舎の廊下を歩き階段を上がる。すでに今年度の部活動は始まっていて、どこも新入生を迎える準備で慌ただしくしている最中なのだろう。

「あれー、友子じゃん」

階段の踊り場から声がした。友子はともたんの名前だから、彼女の友達だろうか。

「あ、久しぶりー、元気だった？　これから部活？」

ともたんは軽く手を上げると、声の主に話し掛けていた。れみいはともたんの後を陰法師みたいに付いて行く。

「あき、先行つて。ちよつと話して行くから」

「はい、じゃあ部室にいますね」

「うん、またあとでね」

「遠野さん、また後ほど」

私は二人と別れて先に階段を上った。階下に目をやると、ともたんはすでに話し込んでいる様子だった。

最上階へ辿り着き、また廊下を歩く。四階建ての旧校舎、その最上階に私の所属する演劇部があった。

いつものように扉は開け放してあった。他の部活動はどこも扉を閉め切って活動しているが、演劇部の活動中は、昔からの慣習でいつでも扉を開放していた。私ももう慣れてしまったので今更何とも思わない。帰りは鍵を閉める必要があるが、朝になると誰が開けているのか、扉はいつも開いていた。

そして部室に近づくと、中に人の気配を感じた。はて、ともたんもれみいも今別れてきたところで、他に演劇部室へ足を運ぶ人なんて誰もいないはずなのに。

「こんにちはー」

一応声を掛けながら部室内に入ってみた。すると、見たことのない女生徒が大道具に囲まれて、所在なさに佇んでいた。あどけなさが残る丸っこい顔に、肩まである茶色がかった髪の毛の少女は、まだ色褪せず皺のない紺色の制服の下に真っ白なブラウスを着て、少し

曲がったネクタイを付けている。身長は平均的だと思うが、私より二十センチは高そうだった。校章の色を見ると、去年まで三年生が付けていた緑色。挙動の怪しさからして、新入生だろう。

「あ、こんにちは、お邪魔してますっ」

その新入生らしき女生徒は、私に気が付くと笑顔で歩み寄ってきた。ツンとのりが利いた新しい制服の匂いがして、思わず少しだけ身構えてしまう。詰めてくる距離感が近かった。

「あのお、ここ演劇部の部室ですよね」

女生徒は、大道具や小道具の並ぶ部室内を見回しながら言った。

これだけ色々なセットが置いてあれば、誰も囲碁部や茶道部と見間違はずはないだろう。

「はい、そうですね。あなたは新入生？」

私は笑顔を崩さないままの女生徒に質問をした。彼女は大きな目をキラキラ光らせて、はい、と大きく頷いた。

「でも、新入生が部活に入るのは来週からですよね？」

私は会話の主導権を握るために、質問を重ねる。

「って言うか今日は始業式だけだったし。見学にでも来たの？」

「いいえ」

彼女はきつぱりと否定した。あまりにはつきり否定されたので、私は次の言葉を失ってしまった。

「じゃあ……、もしかして道場破り？」

「ふふふ、その通りじゃ。この道場の看板はわしがいただいた！」「いや、ますます意味が分からない。」

「名前は何ていうんですか？」

私から振っておいて無視するのもひどい話だが、まず先に目的を聞かなければ話が進まない。その上、乗ってくるとは思わなかったから続きを考えていなかった。

「はい、漢字で二宮に砂<sup>すな</sup>恵と書いて、二宮砂恵と言います。先輩の言う通り、ぴかぴかの一年生です。友達百人作ることが目標です」  
誰もぴかぴかとまでは言っていない。と言うか、漢字の説明になっ

てない。と言うか、この子は私にケンカを売っているのだろうか。いくら私の背が低いからって。

「で、ここに何しに来たの」

私は警戒心を解かず質問した。まさか、落ちぶれた演劇部をひやかしにでも来たとしても言うのだろうか。

「はい、是非演劇部に入部したいと思い、失礼かとは思ったのですがお邪魔させていただいてしまひました」

私の態度が若干不機嫌なものになったことを感じ取ったからだろうか、今度は真面目に答えていた。もつとも、最後が噛んでしまっているが。

そして私は困ってしまった。わざわざ始業式当日に入部希望を言ってくるような子だ、余程演劇が好きに違いない。それこそ、とまたんの言うところの演劇大好きっ子かも知れなかった。

それなのに、今の演劇部は実態がありませんと告げようものなら、演劇部に入ることを夢見て進学して来たこの子の三年間が、何の張り合いもないつまらないものになってしまう。もしかしたらグレてしまつかも知れない。ただ、この子が本当に演劇大好きっ子ならば、とまたんはきつと喜ぶだろう。

「二宮さんと言いましたね。砂恵ちゃん、で良いかしら」  
まず、一呼吸。

「はい、全然構いません」

「私は、二年の遠野あきと言います。永遠の遠に野原の野、平仮名であき」

「では、あきたん先輩とお呼びしてもよろしいですか」

何故……。しかし、砂恵ちゃんは神妙な顔つきだった。冗談ではないらしい。

「ま、まあ良いです。それで、ですね」

何と言おう。何と言つべきだろう。私の思考が、ぐるぐると目まぐるしく変わっていく。砂恵ちゃんは、餌を待つ仔猫みたいに、ただじつと私の言葉を待っていた。

「ええと、砂恵ちゃん、あなたは何故この学校に入りましたか」

予想外の質問だったのだらう。一瞬目を丸くした砂恵ちゃんだったが、今度は真面目に考え始めた。

「そうですね。正直、この学校だから特別というわけではないです。でも、何故と聞かれれば、夢を見つけるためです」

彼女の言葉に、一瞬耳を疑ってしまった。それは、私と同じだったから。私は別に演劇部に入ることが夢だったというわけではないけれど、高校に入ることを決めた理由は、夢を探すためだった。何故高校に入ったのか。そう聞かれて、夢を探しにと答える人はきつと数えるほどもいないだらう。それなのに、この目の前にいる少女がその希少な答えを持ち合わせていたので、私は驚いた。

もしかしたら、この子がきっかけで何かが変わるかも知れないと思った。私の夢はまだ見つかってはいないけれど、でも、この子が本気で演劇をやりたいと言うのなら、私はもう一度演劇をやりたいと、思った。そう思わせる何かがあった。

私は逸る気持ちで次の質問をしていた。

「では何故、演劇部に入ろうと思いましたが」

その言葉に、砂恵ちゃんは一瞬沈黙した。伏し目がちの視線が、右と左を二往復した。

「正直に言いますと、うち、演劇をしたことがありません」

それも、私と同じだった。何だらう、無性に親近感を感じてしまう。演劇をしたことがない。けれども、演劇に対しての情熱を感じている。

「……大丈夫、大切なのは気持ちだから」

何をするにしても、初めは気持ちが大切で。同じだけの能力があるのなら、気持ちの強い方が想いは伝わる。困難にも打ち勝てる。

「正直に言いますと、うち、演劇にはあまり興味がありません」

「そう、興味がない方が……」

砂恵ちゃんの言葉を何でも肯定してしまいそうになっていた私は、彼女が今発した言葉に肯定の理由を思いつかなかった。

要するに、意味が、分からない。

「……ええと」

「演劇部に、入りたいんです」

砂恵ちゃんは胸の前で、ぎゅっと両手を組んで私に迫った。そこには確かに情熱があつて、演劇をやりたいという強い思いが。

「演劇部は今実態がないから、ぶっちゃけ帰宅部と同じって聞きませんでしたっ」

「……なかつた。微塵も。」

「あんた、それでよく夢を探すためだとかのたまえるわね」

私の類はさぞ引きつっていたことだろう。今の想いを何と言つたら良いのだろうか。そう、この子と知り合つて人生を損した気分だつた。

「夢は、部活動とは関係ありません」

砂恵ちゃんは迷うことなく言つた。それはまあ確かにそうだけど。「うちは、みんなと同じように部活で汗を流して青春、というのは嫌なんです。うちにはうちのやり方がきつとあるはずです。その中から、うち自身で選んだ夢を見つきたいんです。だから、何て言うか……校則で強制的にどこかの部活へ入らなければならぬというのは嫌なんです」

目の前の少女は、必死に訴えていた。なるほど、確かに活動を強制されることのない演劇部でなくては叶うことのない願いだと思ひ、私は少しばかり感心した。この子は中途半端にひねくれているだけで、自分なりの考えを持つてここまで来たのだ。

しかし、だからと言つて幽霊部員希望の人を部員として迎えるのは気が引けた。ともたんが悲しむのではないかと思えて。

「でも、校則でどこかの部活に言つたけど、そんな校則あつたっけ？」

少なくとも私の記憶にはなかつた。去年のクラスメイトでも部活動に入っていない生徒は何人かいたわけだし、演劇部室に顔を出しているれみいだって無所属のはずだ。

「えっ！ 説明会で一年生は部活に入らないとダメって言われましたよ」

「あら。それなら今年からそうだったのかなあ。よく分からないけど」

もしその話が本当だとしたら、かわいそうなことだと思った。私なんかは別に、部活に入りたくないのなら入らなければ良いと思っ  
ているわけだから。

「なので、是非お願いしたいんです」

砂恵ちゃんは、絶るような眼差しを私に向けた。

「うーん。弱ったなあ。まあ、そうまで言うなら私は入部を許可します。共感出来る部分もあるわけだし。あー、けれども実はあともう一人、演劇部員がいるんです。その人から許可を得ないと、部員として入ることは認められないんです」

仕方がないので、結局判断をともたんに委ねることにした。

「わあ、ありがとうございます！ あきたん先輩ラヴです！」

砂恵ちゃんは、両手を上げて喜んでいた。この子、一ツリアクシ  
ョンが豊富だなあ。

「それで、もう一人の演劇部員はいつ来るんですか？」

「そうねえ、もうそろそろ来るころだと思っただけど」

私は窓際の席に腰を下ろした。ここからは眼下に立ち並ぶ桜の木が見える。それはまるで、桜の花びらを編んで作られた絨毯のよう  
に見えた。ふわふわしていても気持ち良さそう。けれども本  
当に飛び乗ろうものなら、そのまま突き抜けて落下してしまうこと  
は言うまでもない。桜の花びらを派手に撒き散らしながら、地面へ  
まっさかさまに激突するのだ。だから、間違っても桜の絨毯に飛び  
込んではいけない。人はそれを常識として知っている。

桜は見て楽しむもの。きつと、様々な犠牲の上に常識は作られて  
きたのだらう。

「あきたん先輩は、普段は演劇部で何をしているんですか？」

「普段は雑談してることが多いかしら。とりあえず部室に集まって、

そのあとどこかに出かけることもありませよ」

そう、私たちは本当に、よく飽きもせず一緒にいるものだと思う。  
「今は討論部なんですね」

砂恵ちゃんは、にこりと私に笑顔を向ける。春なのに、ひまわりが咲いたような笑顔だと思った。

「あはは、そんな立派なものじゃないですよ。私たちはただ……楽しいからそうしているだけです」

「どんなことをお話するんですか？」

「そうね。朝食から教師から、はては深層心理に至るまで。目指すのは、人生にちよつとしたヒントをくれる喋り場です」

少なくとも、私は日々の生活を豊かにしてくれるものだと思っている。

「おお、それは面白そうですね。二人だけで語られる赤裸々な世界。色々な意味で奥深さを感じさせてくれますね」

若干、いやかなり、誤解が入っているようだった。

「ちなみに演劇部所属は二人ですが、もう一人いるんですよ。だからいつも三人」

「三角関係ですかっ」

「違います」

何と云うか、予想の斜め上に行く思考回路を持っていると思った。まあ、面白いから良いけれど。

「部員じゃなくてもおかまいなしなんですね」

「言い方がちよつと引つかかるけれど、まあそうですね」

「人生について考えるっていうのも、良いですね。やはり、考えるならば今の方が良いと思いますよ、うちも。だって、ここを卒業するころにはもう取り返しのつかないことがたくさんありますもん」

私はこの時点で、砂恵ちゃんの性格がおおよそ把握出来ていた。ふざけたような態度や言葉を発しているが、おそらく根はとても真面目な子なのだろう。ただ、素のままの自分では受け入れてもらえ

ないと考えている。だからこうして明るい自分であるように努力しているのではないだろうか。

私は、そうであれば良いと思った。砂恵ちゃんが私の想像通りの性格ならば、私たちはきつと長く付き合っていけるだろうから。

「砂恵ちゃんは、考えることが好き？」

「はい！」

砂恵ちゃんは、大きく頷いた。その拍子に彼女の髪を留めていたピンが外れて床を滑った。髪が重力に従い、さらさらと顔の前にかかる。

「あら、こつちに……」

私の足元に落ちたので、自然に手が伸びて拾おうとしていた。が、砂恵ちゃんの手が先に伸びてきてそれを拾った。

その瞬間、私は見た。見てはいけないものを見てしまったと、思った。

それは、左手首に刻まれた、無数の傷跡だったもの。触れてはならないであろう過去を見てしまった私は一瞬手が止まってしまい、その際に砂恵ちゃんがピンを拾ったのだ。

「あはは、ごめんなさい。勢い余って落ちてしまいました」

砂恵ちゃんは明るく笑う。そして元通りに髪を留めた。良かった、私が見たことに気付いていないようだ。

「どうしました？」

急に私が落ち着かなくなった様子を見て、砂恵ちゃんが不思議そうに首を傾げる。

「ううん。ちょっと遅いなって思って」

私は彼女から目を逸らし、開け放たれたドアを見つめながら言った。ああ、私、困惑している。どうしたら良いのだろう。何を話したら良いのだろう。そんなことを考えてしまっている。特別気にする必要はないというのに。それが分かっているながらも、動揺を隠せない自分が不甲斐なかった。

「うちは待ちますよー。全然平気、ですっ」



砂恵ちゃんは小さく両手をぐつと握った。そして私は、彼女の性格にもう一つの可能性を考えていた。元々明るかった少女が、何かのきっかけで大きく変わったということ。何かのきっかけで、深く考える術を持った可能性を。

「砂恵ちゃんは普段、どんなことを考えていますか？」

次の質問。少なくとも私は、この子のことを知りたがっている。この子の歩んできた人生を、知りたいと感じている。

「そうですねえ……。難しい質問ですねえ……。困りましたねえ……。何を考えているんでしょうねえ……。あはは」

けれどもそれは出てこなかった。意図的に隠しているのか、あるいは本当に何も思いつかなかったのか。言いたくないのかも知れないと思っただが、今の私には分からない。ただ、私も突然聞かれると案外出てこなかったりすることもよくあるので何とも言えない。

「最近、うちの夢はなんだろうって、そればかり」

砂恵ちゃんは、思い出したようにぼつりと呟いた。

「全然影も形も見えませんがね。あはは」

風が吹いて、いくつかの桜の花びらが空に舞った。

「夢は待っているだけでは決して訪れません。自分から探しに行かないと。この花びらのように、風に乗って飛び立っていかないと。」

だから、それは前進しているのだと思うよ。探そうと考えているだけでもね」

私は桜の花びらを目で追いながら言った。砂恵ちゃんも、風に舞う花びらを目で追っていた。けれども自由を求めて空へ飛び立ったはずの花びらは、風が止むとすぐにまた桜の木の中へ帰っていった。一度放たれてしまったら、もう二度と帰れる場所などありはしないというのに。

「うちは、桜よりはたんぼの方が良いですね。たんぼの綿毛なら、どこまででも行けそうな気がします」

「奇遇だね。私も今そう思いました」

二人、笑った。

「あき、お待たー」

ドアの方から声がして振り向くと、外見は常に上品な雰囲気纏っているともたんが、外見とは似つかないフランクな挨拶と共に再び現れた。お付きのれみいも変わらず一歩下がった所に立っている。ともたんは、何より目に力がある。その攻撃的なつり目と、一見近寄りがたい雰囲気。砂恵ちゃんは怯えてしまわないだろうか。私は少し心配だった。

「こんにちは！」

私が挨拶するより先に、砂恵ちゃんが不必要に大きな声を出していた。そして、ともたんに物怖じすることなく向かっていく。この子、度胸あるなあ。

「ん。この子は？」

ともたんはいまいち状況が飲み込めていない様子で、私に聞いた。初対面でもたんに近付いて行ける砂恵ちゃんもすごいが、砂恵ちゃんの詰める近い距離感にも怯むことがないのは、さすがともたんだと思った。

「新人生なんですって。話、聞いてあげて下さい」

「初めまして、うち、今年からこの学校に入りました、漢字で二宮に砂恵と書いて、二宮砂恵と言います。演劇部に入部希望です」

砂恵ちゃんはそう言っ、おじぎをした。

「えっ、マジ？ ……というか、名前の説明の部分、もう少し良く考えて修正した方がいいわよ。今度からね」

あ、それには私も同意。

「あき、説明したの？」

ともたんは言いながら、ちらりと私を見やる。

「ああ、ちなみにあたしは三年の永野友子です。永遠の永に野原の野、友達の友に子供の子」

ともたんは、砂恵ちゃんに当て付けるように名前の説明をした。

「おお、漢字が浮かびます！」

砂恵ちゃんともたんの説明に感動していた。素直で良い子だと

思った。

「説明しましたよ、私。でも、目的が違うみたい」

私は言う。ともたんは一瞬、考える素振りを見せた。

「申し遅れました。私は、二年の緒方怜美と言います。演劇部員ではございませんが、友子が演劇部に所属しておりますので、私も良く一緒に過ごさせていただいております。どうぞお見知りおきを」

れみいは下級生の砂恵ちゃんにも礼儀正しくおじぎをした。名前の説明をしなかったのは、嫌味に思わせないためだろうか。

「いえいえ、こちらこそ以後お見知りおきを」

砂恵ちゃんもつられてぺこりとおじぎした。

「永野先輩は、ともたん先輩。緒方先輩は、れみい先輩でよろしいですか？」

キツともたんが私を睨んだ。いや、私呼び方までは教えていません。

偶然だと手を振る。この子、もしかして私と同じあだ名をつける感性を持っているのでは。

「まあ、呼び方なんて何だっていいのよ。何だって」

ともたんは自分に言い聞かせるように頭を掻いた。

「私も、お好きなようにお呼び下さい」

にこりと笑顔のれみい。肩までの黒髪がさらりと揺れる。この二人、分かりやすいくらいに対照的。

「はい、ありがとうございますっ」

砂恵ちゃんは一人ではしゃいでいる。見事なまでに、みんながみんなな性格はバラバラだった。

「それじゃ、入部テストをします」

「へ？」

砂恵ちゃんは、ともたんの突然の言葉にあっけにとられている様子だった。と言うか、入部テストがあるなんて私も初耳だった。

ともたんは、れみいに何事かを指示しながら二人で手早く簡単な舞台を作った。

「はい、それじゃあ、この舞台で演劇に対する熱い思いを語って下さい」

そう言っつて、少し埃っぽい舞台を残して二人は用意した席につく。私たち三人は、舞台を正面に等間隔で座る形となった。

「……」

砂恵ちゃんは口を開くことも、動くことも出来ずに固まっていた。突然そんなことを言われ緊張しているのだろうか。あるいは、みんなの度肝を抜くようなネタを考えているのだろうか。しかしまず前提としている演劇に対する熱い思いがないということが致命的に思えた。やや間があつて、舞台に砂恵ちゃん上がる。その横顔からは、どんな感情も読み取ることは出来なかった。

「ええと、初めまして。今年からこちらの学校でお世話になることになりました、二宮砂恵と言います。誕生日は八月二十八日の乙女座で、偶然一年八組出席番号二十八番でした。すごいですよ、これって。あ、血液型はB型です」

彼女は、淡々と自己紹介を始めていた。ともたんは訝しげな表情で見つめている。れみいは、ふんふんと頷きながら聞いている。ただ、どちらにも共通しているのは真剣であるということだった。

「みなさんは、どんな思いを抱いてこの学校に入学してきましたか。うちは、うちの人生を楽しいものでいっぱいにしたいと思い、入学してきました。そのためには……、自分の個としての存在が、とても大事なのだと思います。何て言うか……色に染まらず、真っ直ぐに自分を主張し続けることが大切であると、思いました。だから、何かに縛られて行動することは、出来ないと思いました」

私は、自分の入学当時を思い返していた。ちょうど一年前、今と同じように桜の花が満開で、世界は悲しみに満ちていると思っていた、あのころを。私は、私自身の夢を探すために、この悲しい世界での救いを探し求めるために、入学して来た。当時、湧き出す夢は何もなかったけれど。

「この学校では、一年生は部活動に入らなければならぬと聞きま

した。それは、うちにとっては大問題でした。うちの人生を、貴重な時間を、部活という興味の無いものに対して費やすなんて、もったいないと思っただから。だからうちは、とても困りました」

ともたんの表情が明らかに固くなった。それも仕方のないこと。今でこそ演劇部は活動休止状態だが、まともに活動していたころは、ともたんの情熱は演劇だけに向けられていたのだから。それは野球部員が甲子園を目指すように、高校生活の全てを賭けて演劇に打ち込んでいた。普段は落ち着いて見るともたんではあるが、演劇こそ青春と感じていたに違いなかった。そのともたんが、幽霊部員希望の砂恵ちゃんに対しどのような感情を持つのかは容易に想像がついた。

だが、ともたんの想いなど知る由もない砂恵ちゃんは言葉を続けた。

「けれども、ちょうどタイミング良く噂で聞きました。演劇部ならば今は活動していないから、入部しても活動する必要がないと。それを聞いたうちは、演劇部に入ろうと思いましたが。そして今、ここにおいて、演劇部のみなさんの前で挨拶をしています。演劇に対する熱い情熱ではなくて、ごめんなさい」

砂恵ちゃんは深々と頭を下げていた。ともたんはじっと黙っている。一体何を考えているのだろう。

私はあまりにもいたたまれなくなつて、窓の外に目を向けた。空には雲が流れている。風が、流れている。私たちはみんな、その大気の下で生きている。目的は違つても、性質が違つても。みんな同じなのだ、ふと、そんなことを思った。

「……でもっ」

砂恵ちゃん言葉は、続いていた。

「うち、あきたん先輩と話をして、こんな空間もとても良いなつて思いました。ここには自分一人では得ることの出来ない想いが、たくさん詰まっているのだと思います。今日の朝食の話から、教師の話、果ては深層心理に至るまで。話すことで、気付くことがある。

聞くことで、知ることがある。どんなことでも話し合えるって、とてもとても素晴らしいことなんだと思います。だから、初めは幽霊部員になるつもりでしたけど、そんな部活なら、うちも参加してみたいと思いました。断られたら駄目で元々と思ってましたけど、今は、この演劇部にすぐ入りたいと思うんです。そうすることが、自分の夢を探す近道になると思うから」

まくし立てるようにして、砂恵ちゃんはたくさんのおいを伝えていた。この子は、何だろう。淀みなくこれだけの言葉を口にして。余程頭の回転が早いのだろうか。そんなことに感心してしまっていた。

そして、ともたんは黙っていた。少し前かがみになりながら口を手を添え、つり目を細めて何事かを考えている様子だった。れみいは黙ってその様子を見ていた。

「それでは、足りないでしょうか……」

砂恵ちゃんは、ともたんの様子を見て肩を落としていた。

「私は……それで良いと思います。私は、砂恵ちゃんの考え方、共感出来ますから」

助け舟を出そうと思っっているわけではなかった。ただ、砂恵ちゃんの想いは私に似ていると、思ったから。

「ありがとうございますっ。もし演劇部に入ったら、最近流行りの役に立たない無駄知識を毎日一つ披露したいと思えますっ」

それは少し興味があるが、別に心惹かれるほどのものではない。

ただ、砂恵ちゃんらしい調子の良さが戻ったように思えて、私は少し安心した。

「あたしは、今でこそこんな落ちぶれた演劇部にいるけれど」

椅子に座ったままのともたんが口を開いた。私たちの視線がともたんに集まる。

「これでも、演劇が好きだったのよ。それはもう、毎日が稽古付けの日々だったとしても。今でも好きよ、演劇から離れてもう半年になるけれど。現実の自分とは、違った自分を演じることが出来る。」

現実には多くの人がいて、その中で自分はどこまでも脇役かも知れないけれど、物語の中では、主役にだってなれる。それって、素晴らしいことだと思った。だって現実のあたしは、がんじがらめで動きなんて取れなかったから」

れみいの表情が曇る。ともたんの苦悩を一番分かっているのはれみい以外にはいない。

「だから、違う自分を演じることはとても楽しかった。全ての動きが決められた通りだったとしても、全てのセリフが台本通りだったとしても、永野友子以外の自分でいられることが、とても心地良かったし、楽しかった」

ともたんの独白が続く。私も聞いたことがない、ともたんの胸の内だった。

「三年生が引退するとなって、あたしがこれからの演劇部を頑張って盛り上げていこう、引つ張っていこうと思った。けれど、そのころちょうど家の大事な手伝いが忙しくなって。戻ってきた時にはもう、あきしかいなくなってた」

半年前のあの日。久しぶりに部屋へと姿を現したともたんの悲しげな表情が、今も忘れられない。

誰もいない演劇部室で、一人ぼつんと小道具の手入れをする私の姿を見て、すでに全てが手遅れであると一瞬にして悟った時、ともたんは何を思ったのだろう。つい先日までは騒がしいまでの賑わいを見せていたはずの演劇部室に一人ぼつちでいる私を見て、ともたんはどんな感情を抱いたのだろう。

「その時、あきがあたしに言ったの。ほっとしたように、『私、ともたんを待っていました』って。今も、あの言葉が耳に残ってる。忘れられない。だから、あたしは演劇部に残ろうと思った。例えもう活動がなかったとしても。実際、そうして過ごしてみると楽しかった。演劇も楽しい。けれど、あきや怜美と話をして過ごす日常も、とても楽しかった」

私とれみいは黙っていた。当時の記憶が鮮明に蘇る。もう、演劇

部は終わってしまったのだと。だからこれからは、他にもっと楽しいことを見つけてようと決めた。

「あかし、今年の演劇部はどうしようと思っていた。真面目に演劇がしたいって一年生が、来てくれるのだろうかと思ってた。それなら、もう一度、やり直せるかも知れないと。そして今日、二宮さん、あなたがいた」

ともたんは、そう言って砂恵ちゃんを真っ直ぐに見た。

ああ、きつと、演劇部室にいた砂恵ちゃんを見て、ともたんもまた私と同じことを思っていたのだ。

砂恵ちゃんは、そんなともたんの厳しい視線から逃れようとはしなかった。例えば自分が望まれなかった存在だということに気付いていながらもなお、ともたんの視線を受け止め続けていた。

この子には、自分を押し通せるだけの強さがあると思った。

けれども、意志の力だけでは、叶わない。届かない距離が二人の間には存在していた。

「あかし、期待してしまった。馬鹿みたい。この子はもしかしたら、あたしなんかよりずっと演劇に情熱を持っているんじゃないかなんて、そんなことを思った。思ってしまった。馬鹿みたい」

「でも、人生には、情熱を持っています。……関係ないですね。ごめんなさい」

二人を隔てる壁の冷たさに気付いた砂恵ちゃんは、何と云って良いのか分からないのだろう。ドアが開け放たれているはずの演劇部室内に、重く居たたまれない空気が逃げ出せず、に充滿していた。

砂恵ちゃんは、何故逃げだそうとしないのだろうか。私には彼女がまるで、一人凍り付いた世界の雨に打たれ続けているように思えた。

「ううん、いいの。あなたが悪いわけじゃない。きつとこれで良いんだと思う。きつと、今のままでも、良いんだと思う。だって、今のあたしにとってはどちらでも同じだから」

ともたんは、同じ、と言った。けれども、私は思った。本当にそ



うなのだろうか。

「あの、いいですか」

私は口を挟んでいた。三人の視線が私に集まる。れみいだけとはもたんを見ていたが、もたんが私に視線を向けたことを確認すると、少し遅れて私を見た。

「私にとって演劇部は、今も昔も大好きな場所です。昔みんなで真面目に演劇をしていたころも、演劇とは無関係に集まっている今もここで、一呼吸置く。たったそれだけの間でも、私の中からたくさん言葉が溢れ出そうになる。私は迷いをかき消すために首を振った。」

「私、思いました。私が本当に求めていたものは、演劇をするという行為ではなくて。ただ、ここにいる、ここにいた、演劇部の人たちに会いたかった。それだけなのだと思います。だから私は、演劇をしないでなくても良いんです。それぞれの情熱が、向いているものをやれば良い。私にとってはそれで十分なんです」

春風に、視界が揺れた。

「落ちぶれてなんかいません。演劇部は、私にとっては今だって大好きな場所なんです」

ぐつと、急に感情が高ぶった。私を救ってくれたのは演劇部だったから。今の私があるのは演劇部のお陰だったから。だからもたんにも、今の演劇部を昔より劣るなんて言うてほしくはなかった。

「どちらも、比べられません。私にとっては」

私は、普段は冷静なつもりだ。でも、こういうのは駄目。感情が抑えきれない。些細なきっかけで、いとも簡単に揺れ動いてしまう。そんな自分が恥ずかしかった。

もたんが、私へ向けていた視線を泳がせた。そして再度私を見て、何か言おうと口を開きかけたが、そのままれみいへ視線を送った。

「友子……」

れみいは、静かに一回頷いた。その眩きにも似た呼びかけには、

ともたんと長い時を共に過ごしてきたれみいしか知らないであろう、  
たくさんの意味が詰まっっているような気がして。ともたんも、それ  
だけで全てを悟ったように、れみいへ頷き返した。

ともたんが椅子から立ち上がる。一つ息をついて、私と向き合っ  
た。

「……あき。ごめんなさい。あなたがそんな風に思っているなんて、  
思ってもみなかった。あたしも、今の演劇部は好き。ただ、あたし  
は形にこだわり過ぎていたのだと思う。演劇部らしい活動なんて、  
全然してないから。それでも、最後に残ったのはあなたとあたし  
の二人だけだったものね。だからね、あたしは、あなたと二人で何  
が出来るところうって、思ってた。あ、怜美もいたから、三人ね」

たくさんいたはずの部員が、ある日突然二人と一人になってしま  
った。あの時私は、これからどうしていくべきかひどく迷っていた。  
何をすべきなのか、何が、本当にしたいことなのか。

でも。その答えは、見つけようとしなくとも、あっさりが見つか  
ったのだ。自然に私の心の中へと流れ落ちてくるように。もうずつ  
と昔から、そうしてきたように。ぽっかりと空いたはずの穴は、い  
つの間にか別の幸せで満たされていた。

「あき、言つてたわよね。『演劇はもう出来ないかも知れないけれ  
ど、今までの想いが消えてしまっわけじゃないですよね。だから、  
ここからまた色んなことがしたいです』って。……あたしも、そう  
思った。この二人がいてくれるなら、きつとまた、新しい思い出を  
作っていけると思ったから」

新しい思い出を作っていく。それは、今だけのことじゃない。こ  
れからも、私たちが私たちである限りずっと続いていくこと。

「……だから、これからの可能性を消してしまっっては駄目ね」

ともたんは、砂恵ちゃんの方へと向き直った。もう、ともたんか  
ら迷いの色は消えていた。

「二宮さん。あたしたちは、演劇部員です。けれども、演劇はして  
いません。あえて言うのであれば、日々過ごしていくことが活動な

のだと思います。何故ならばあたしたちはここで、日常過ごしていても得られないようなものを得るために、活動しています。人生をより良く生きるために、活動しています。そんな部活ですが、二宮さんさえ良かったら、どうか入部して下さい」

ともたんが、両手をスカートの前で合わせ、頭を下げた。

「あ、ありがとうございますっ。こちらこそ、よろしくお願ひします」

そう言つて、砂恵ちゃんも再度、頭を下げていた。

帰り道。今まで三つだった影が、一つ増え四つになった。

夕暮れ時の通学路をゆつくりと歩いていく。遠くに私たちが目指す駅の屋根が見える。高い建物は駅の周辺にぼつりぼつりと三棟建っているだけで、この辺りは自然が多い田舎町だった。左手にはフェンスがあつて、越えた先には名前も知らない多種多様な木が生い茂った、なだらかな丘が続いている。右手には閑静な住宅街が緩やかな坂の上に立ち並んでいる。通学路は人間が住む空間と自然が住む空間を、ちょうど隔てる境界線みたいに通っていた。

左から、砂恵ちゃん、私、ともたん、れみいの順で、横並びに歩いていた。道路は車もあまり通らない。この時間は大半が、同じ学校に通う生徒と近所の人利用している。そんな道なので夜道は少し怖いけれど、教師の見回りが数時間おきに行われていることと、街頭の灯りが絶えないことで安全を保っていた。

「この道つて、夜になると出そうですね」

砂恵ちゃんがぼつりと口を開いた。

「え、何が？」

「変質者」

幽霊とか言つのならまだかわいげがあるのだが、ストリートすぎる。まあ心配する気持ちはよく分かるけれど。

「うん。学校に近いしね。女子高生を狙つて、真冬でも裸にコート一枚の男が出たりするわよ。目の前でいきなり、ぱつと広げるやつ」

ともたんがそんな仕草を交えて話す。その程度のことならば私も大分耐性が付いていた。彼らは定期的に現れて、しばらくすると入れ替わる。

「うち見たことないです、それ。見てみたい！」

砂恵ちゃんは、大きな目をキラキラと光らせてともたんの話を聞いていた。この子、怖いもの知らずなのかしら……。

「春先だし、砂恵みたいな新人生狙いで現れるやつ出てくるわよ。だから安心なさい」

「うわあ、それは楽しみですね」

「きゃーきゃー言つてあげると喜ぶわよ」

「きゃー」

ともたんも、砂恵ちゃんとすっかり打ち解けた様子だった。れみいは元々自分から人に話しかける性格ではないが、表情を見ている限りでは、れみいも砂恵ちゃんを受け入れているように見えた。一年前のれみいは、ともたんに近づく者全てを排除しようとしていたのに、今はともたんが気に入った相手であれば、れみいも例外なく仲良くすることが出来る。それはすごいことだと思つたし、ともたんを信頼していればこそだと思つた。

そんな具合で、砂恵ちゃんはすぐに私たちの輪に溶け込んでいった。数時間前に知り合つたばかりとは思えないような感覚。もう、何だつて話し合えるような、そんな連帯感。あるいは、私だけが抱いている幻想なのだろうか。……違つてほしい。みんながそう思つていてくれてほしい。

少なくとも、砂恵ちゃんに会つて、これからの日々がとても楽しみに思えた。私たちは一人一人が違う性質を持って存在している。それぞれがそれぞれの長所を活かす事が出来たなら、私たちは何だつて出来そうな気がしていた。

「ちなみに、みなさんの血液型は何ですか？」

砂恵ちゃんが質問した。

「私は、B型です」

私が答える。

「あたしもB型よ」

ともたんが答える。

「私も同じく、B型です」

れみいが答える。

「うちもB型です」

自己紹介で聞いたが、砂恵ちゃんも言った。

「何だか、何と言うか、とても面白そうな集団ですねっ」

そして、笑顔になる。

私は、血液型で人の性格や性質が分かるとは思っていない。ただ、少しの参考にはなると思う。例えば月間天気予報を見た時に、ひと月後の天気を見て、頭の片隅に記憶を残す程度に。

「あはは。そうですね。みんながみんな個性的な集団です」

私は笑った。砂恵ちゃんが笑顔になることが、私には嬉しかった。この子が何を隠しているのかは分からない。けれども、今は笑えている。今の砂恵ちゃんが笑顔になれるのは、私の知らない世界を傷つきながらも歩み続けてきた結果だろう。そして私と知り合ったのであれば、友達になったのであれば、せめて笑顔でいてもらえたら。そう思うことは、傲慢だろうか。

「さて、そろそろ駅に着くわね。砂恵はどこまでなの？」

ともたんが定期を取り出す。周りの風景は、すっかり昔ながらの古い店が並ぶ商店街になっていた。

砂恵ちゃんも、定期を取り出して見せてくれた。

「あら、私と近いですね」

「あ、そうなんですか。それは良かったですっ」

私の言葉に、砂恵ちゃんが喜んでいた。ここからは電車に乗って二十分ほどの二つ離れた市。そこが私と砂恵ちゃんの住む街だった。私が五つ目の駅で、砂恵ちゃんは六つ目の駅で下りる。

ともたんとれみいは逆方向の都会に住んでいるので、ここでお別れだった。

「それじゃあね、あき、砂恵。また明日」

「それではお二人とも、お気をつけてお帰り下さい。ごきげんよう、さようなら」

別れの挨拶を交わすと、二人は改札を過ぎ人の波に混じって、逆側のホームへと続く階段を上がって行った。砂恵ちゃんは、そんな二人の姿をじっと見つめていた。

もう少ししたら、今度は向こうに見える階段から二人が下りてくる。いつもと同じく、ともたんの後ろにれみいが寄り添うようにして現れるのだろう。その姿を見ることが私には覗き見をするようではばかられ、二人と別れたあとはいつも階段から離れたホームへと移動する。もし逆側のホームにいる二人と目が合ってしまった時、どう反応して良いか分からないから。私は歩き出す。今日からは、砂恵ちゃんと一緒に。

「二人になっちゃいましたね」

隣を歩いている砂恵ちゃんが、ぽつりと呟いた。

「そうね。今日一日は、どうだった？」

私は何の気なしに、砂恵ちゃんに聞いてみた。

「色んなことがありました。ほんとにー、何て言うか、色んなことがあったような気がしますね」

私は笑った。いきなり上級生に囲まれて砂恵ちゃんも大分疲れただろうから。じきに慣れるだろうけれど、それでも私は出来るだけ早く慣れてもらいたいと思った。

「そうね。私も、今日は色んなことがあったと思う」

今日の出来事を、私はきつと忘れないだろう。みんなとの絆が更に深まったように思えるから。そんな一日で本当に良かった。

ホームには、同じ制服を着た学生や、他校の制服を着た学生、仕事帰りのサラリーマンが十分に一本の電車を待っていた。彼らは今日一日で、どんな体験をしたのだろう。どんな経験を積んだのだろう。この中の誰よりも、私は充実した一日を過ごしたと言いつらしてやりたい。そんなことを思ってしまうくらいに、私には今日とい

う一日が、かけがえのない思い出になると感じていた。

春の西日が、私たちの影を線路に落とす。電車が来たら私の影はいつも簡単に電車へと姿を移すのだろう。もしも電車に移れずにそのまま轢かれてしまったら、私は一体どうなるのだろう。そんな現実には起こりえないことを、線路に落ちた影を見ると考えてしまう。「でも、うちは。あきたん先輩に出会えて良かったです。それはほんとに」

砂恵ちゃんは、安心した、と言うように胸を撫で下ろした。

「こんなかわいらしくて優しい先輩で良かったね」

「うんうん。あきたん先輩って、小さくてとてもかわいいです。しかも人の心を読んだみたく、的確に優しい言葉をくれます」

小さい、は余計。

「私、気に入った人には優しいよ。だけど、気に入らない人には厳しい」

「じゃあ、嫌われないようにしないとっ」

「あはは、大丈夫。砂恵ちゃんが砂恵ちゃんのままにいるならば、私は嫌いにはならないから。ああ、だからといって無理はしないでね。って言うのも難しいかも知れないけれど。まあ、あまり気を使わないでね。それから、困ったことがあつたら言ってきてね」

今までこの外見のせいで、中学生のころはあまり先輩として扱われたことがなかったこともあつてか、今の私は色々と面倒見の良い先輩でありたいと思った。

「わーい、ありがとうございます」

ホームにアナウンスが流れ、夕陽でオレンジ色に染まった六両編成の電車が滑り込んできた。そうして、当たり前のように私と砂恵ちゃんの影は、せわしなく電車の形に沿って変形を繰り返した。

電車に乗り込むと座席は一つ二つ残して埋まっていたので、私はドア付近に立って何とはなしに窓の外へと目を向けた。

「もたん先輩、初めは怖い人かと思いましたけど、やっぱり優しい人でした。それに、すごく綺麗な人でしたね」

車輪が鉄を擦る音を鳴らして動き出す。そしてすぐに、ガタンゴトンという電車特有の音に変わっていった。

「うん。ともたんはすごく優しい人。私なんかよりも全然。親が権力を持つていると、往々にしてわがままで生意気な子供が育つと思つていたけれど、ともたんは例外だと思つた。確かにプライドはちよつと高いところもあるけれど、でも人の傷つくようなことはしないからね。……まあ、れみいには厳しいけど。でもそれもきつと、二人の間に深い信頼関係があるからなんだよね」

演劇のことを何も知らずに演劇部に入った私を、一番気にかけて色々と教えてくれたのも、ともたんだつた。厳しくも、優しい。ともたんはきつと、将来人の上に立つに相応しい人間になることが出来る。私はそう思つている。

「れみい先輩はあんまり話さなかつたですけど、あの人はすごい人だなつて思いました。別れ際の『ごきげんよう』つて、聞きました？ そんな言葉使う人なんて初めて会いました。感動ですっ」

「あはは、れみいは生まれた時からずつともたんの秘書だからね」  
言つて、ふと思つた。それは一体、どんな人生なのだろう。いつもともたんと一緒に、れみいと二人でゆつくり話す機会はあまりないから、何を思い日々を過ごしているのかは分からない。けれどもあのれみいのことだから、きつと毎日ともたんのことをばかりを考えているような気がした。二人は本当に固い絆で結ばれている。例えば主従関係から始まつたものだとしても。私には、二人がとても羨ましかつた。

「すごいなあ。羨ましいです。二人とも」

「うん。そうだね。私には、あの二人の間に割つて入ることは出来ないだろうから。だからいつも、二人プラス一人。そんな感じだつた」

私が二人の関係を気にしてそう言つている、というわけではないと思う。ともたんとれみいには阿吽の呼吸というものがあつて、私はそこに付いて行きたいのに、ふとした時に置いてけぼりを食らつ



てしまうような、そんな感覚。私がどんなに頑張っても積み重ねた時間が違いすぎる。人間関係は時間の積み重ねによってその深みが増すのだから、私が追いつけないのは仕方のないことだった。もちろん、それを理由に諦めてしまうのは悔しいけれど。

「じゃあ、これからはうちがあきたん先輩と仲良くなりますよ。そうすれば、先輩一人が淋しい思いをすることはなくなります」

「あはは、そうね。そうすれば、二人プラス二人でちょうど良いね」  
「今は、三人プラス一人ですから。うちから見たら、そんな感じですよ」

「砂恵ちゃん……」

砂恵ちゃんは、流れる景色を見ていた。たくさんの一軒家が線路沿いに並んでいて、それは本当に流れているように見えた。家から漏れる灯りがたくさんの波を作る。そして次には、畑を流れる風と並走する。私は、電車が好きだった。いや、正確に言うと、電車から見る景色が好きだった。そこには、たくさん知らない人々や、たくさん知らない家がある。隣の道路がどんなに渋滞していても関係なく走っていける。決められた線路の上を、決められた時間に決められた通りに。電車は変わらない。変わるのは、そこから見える景色。毎日少しずつ違う表情を見せ、一つとして同じ景色は存在し得ない。だから私は、悲しみに染まりながらも、この世界は生きているのだと思う。ここから見える一つ一つの家の中に、人生というドラマがいくつも詰め込まれて。そのドラマを少しずつ覗くことが出来るなら、どれだけ面白いだろう。そんなことを思うのだ。

「うち電車通学なんて初めてで、ここから見える風景がとても新鮮です。大興奮です！」

まあ、中学では私立でもない限り電車通学はないだろう。

「ところで、砂恵ちゃんの家はどの辺りなの？」

四つ目の駅を通り過ぎ、次が私の降りる駅。私の駅と砂恵ちゃんの駅は、同じ市内にある。それならおそらく、私も知っている場所のはず。

「うちの家は、ちょうど高速と線路が重なった所にある団地ですよ。まあ、実際はマンションみたいですけど」

それを聞いて私は、ああ、あのマンションかと思った。駅や商店街とは逆方向なのであまり通ることはないけれど、市内でも一番大きなマンションだ。続いて中学校や小学校を尋ねると、私が通っていた学区の一つ隣だということが分かった。

「それは残念だなあ。同じ学校だったら良かったのに」

そうすればもしかしたら、何らかの形で知り合いになれていたかも知れないのに。そうすれば砂恵ちゃんの過去も、もう少し何か分かったかも知れないのに。今この瞬間、もっと仲の良い二人でいられたかも知れないのに。

「うちも残念です。あきたん先輩と出会うのに、十五年もかかってしまいました」

何だかそんな風に言われると、ものすごく感慨深い気持ちになる。だが、一歩間違えるとキケンな領域に足を踏み入れてしまいかねない発言でもある。まあ、ここは素直に受け取っておこう。

「あ、そうだ。あきたん先輩、番号交換しましょうよ」

ふいに、砂恵ちゃんが携帯電話を取り出した。それは、細かいストラップが幾十にもぶら下げられた、見るからに携帯し辛い携帯電話だった。

「え？ あ、ごめん、私携帯持ってないんだ」

私は携帯が人間関係を希薄にするものに思えて、持つことをためらっていた。もちろん、とまんもれみもそれぞれに持っていて、携帯を持っていないのは私だけなのだけれど。

「えー、今時携帯持ってないなんて、時代錯誤にもほどがありますよー」

「難しい言葉知ってるわね……。まあ、うーん、ちょっと悩んではいるんだけどね。あると便利だとは思うんだけど」

「それなら買いです！」

砂恵ちゃんはそう言って、強引に紙切れを私に押し付けた。

そうこうしているうちに、いつの間にか電車は五つ目の駅、私が降りる駅に止まっていた。

「あ、やばい降りなきゃ。それじゃあ、また明日ね砂恵ちゃん」

「はい、また明日ですー」

電車から飛び出ると、すぐにドアは閉まり電車が走り出した。そしてドアの向こうから、砂恵ちゃんは見えなくなるまで手を振り続けていた。

もう、日は暮れかかっていた。さっきまで夕焼け空だったはずなのに。オレンジ色の光は、遠い地平線へ封印されていくように、一筋の残光となっていた。

今日一日が、終わっていく。それが、何より淋しいことだと思えて。

今日の私に唯一形として残された、砂恵ちゃんから押し付けられた紙切れ。それは、丸っこい字で書かれた、彼女の電話番号とメールアドレス。何だかそれを見て、私はようやく携帯を持つのかな、と思えた。

だって、こんなの初めてだったから。

私と繋がりたいと。私と繋がっていたいと。そう、言われた気がしたから。

そんな風に思ってしまう時点で、私はすでに彼女のペースに巻き込まれているのかも知れない。でも。

単純に、嬉しかったのだから、それでいい。

もう誰もいない、駅のホームで。

私は砂恵ちゃんからもらった紙切れを、そっとブレザーの胸ポケットへとしまい込んだ。

春の夜風はまだ冷たく、私は身を小さくするようにして家路を急いでいた。

アスファルトに広がるまばらな影に気付いて、ふと視線を上げる

と、私の街にも桜の花が咲いていることに気付いた。

街灯に照らし出された夜桜は、情緒深い趣となって人々を楽しませるのだろうか。

私には桜の種類なんて、ソメイヨシノとシダレザクラくらいしか分からない。けれどもそんな私でも、純粹に綺麗だなと思うことが出来た。

桜を見て私は、また新しい一年が始まったな、と思った。活動していない演劇部に新しい仲間を迎えて。

これからどうなって行くのかなんて、今の私には分からない。けれど、何かが変わる予感がしていた。

私に何が出来るだろう。それも今の私には、分からないけれど。現実という大海原漂う私の小船を、大きな波が攫って行く。私は沈没を防ぐため懸命に舵を取るのだろう。そうして辿り着く先は、どこなのだろうか。あるいは努力かなわず沈没し、暗く深い海の藻屑と消えてしまうのだろうか。

私の夢は、見つかるだろうか。見つけることが出来るだろうか。

私は足取り軽く、家路を急いだ。これから始まる日々は、きつと今まで以上に楽しくなるだろう。そんな喜びと期待の入り混じった感情を、胸に抱きながら。

そしてその先に、私の夢があると信じて。

## 第一章 演劇部（後書き）

すでに完結していただきますので、二章の推敲をしたらアップロードします。

拙い文章を読んでもいただきありがとうございます。期待外れでしたらすみませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8326x/>

---

あまいろ。

2011年10月22日23時13分発行